遠山鹿子

種彦作

丙申春

六編

へ13
3810
11

國貞画

六

ゑやぢ橋角
山本屋
平吉板

へ13
3810
12

へ13
3810
11

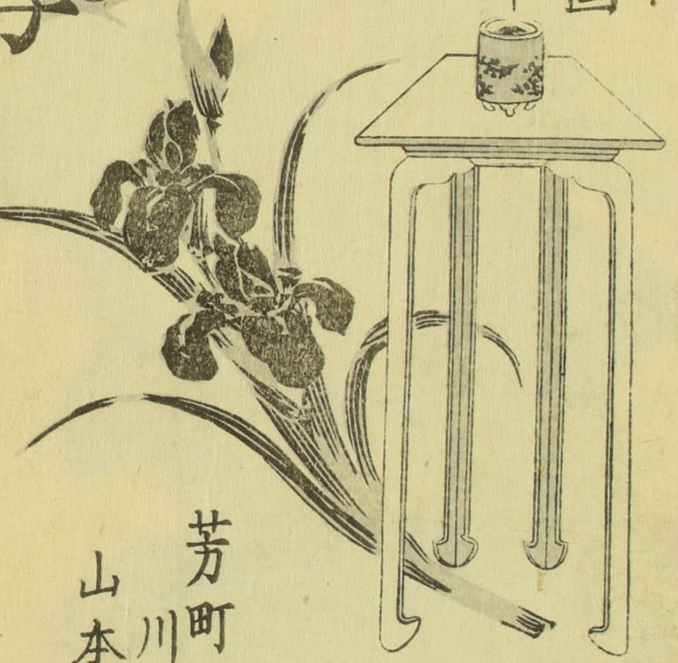
天保丙申孟春發販

へ13
10
11

柳亭種彦作
歌川國貞画

御誂染遠山庵子

六編上冊



芳町
川岸
山本屋
板

さて偖古の後い明晩と敵を討せる講釋仕い張扇の張合ゆえ人の多く集め。續物の繪草紙も又來年と後と含ゝて御見物を待ち上るい是ゝ異ゝる事いるゝとどゝゝまでも無拙作い五年ゝゝ明の年玉ゝゝらゝゝ侭ゝゝちゝゝ乱の荒ゝゝ不破の関ゝゝゝゝゝゝ狐妻のゝゝゝ見る人もゝゝ入のゝゝゝい必定香ゝゝゝゝ屋敷とかゝゝけゝゝたゝゝ消ゝゝゝゝ果る反魂つけゝゝゝゝゝ筆の讀切講釋又來春も相かゝゝゝゝ世話と時代の前座後座其摽題い未ゝ載ゝ

天保七申初春

柳亭種彦

元禄中森田座狂言

なまめき大全

元祖市川團十郎自作

不破伴左衛門せりふ

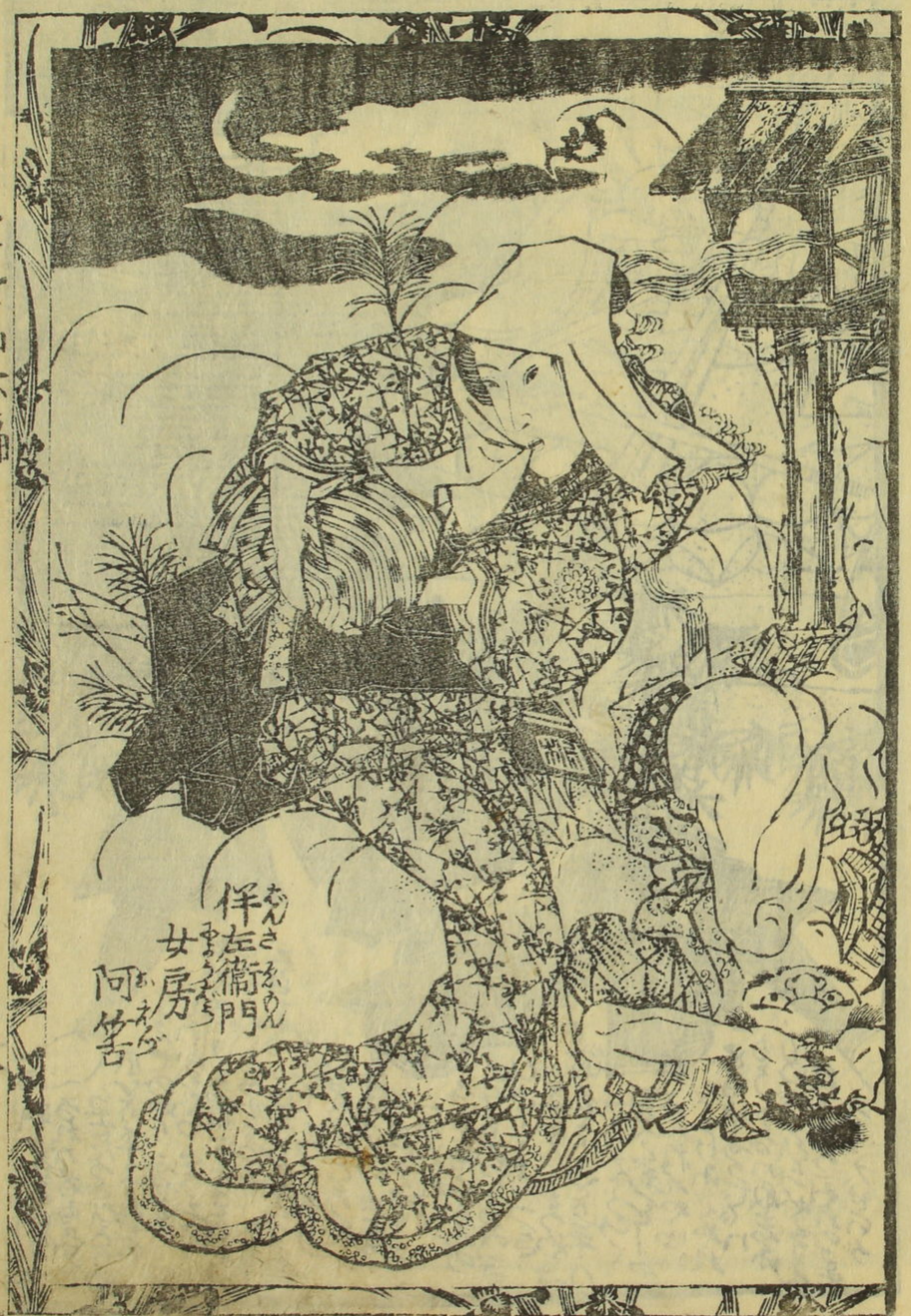
▲こりゃ、とうとこへちめんろ、これらうぜこれいふそのそんなろ
あろくらく大人ろ、ぢたくせん
こんど、ぢ、ぶるいろるこの内で
でろうちるいろができゃうこ
大門ぐちろくまぐちろ
のとすぐで白をよ
黒いとのたるとの
せきざて
おやらり
そろりと
ひっぱれ立て
うふろのろひて
こまのいろの
とやうんぢろう
と天ぐろ
せんぐさん
まろうさされば

回一ッ申あしらぢ仏法あまびせろのあり
女郎あれば加ひてもありやるぎいをどり
たそろうけもろくぐまろおかっこんぢろ
えのんつくりてやんごろるきそのからうお
ふまんとのるだんさまごされとのしとへと
だまくくろさされておとろげるやかれと
あんのりぢやらうぬんいろふろく
馬ろうんぬやうしおりろれて
せんろうろう寺へまるも
ぢまろうせんせんの
ろるとそろられるもあそぢ
ぢっとやそも
あくまるまをこ
りろるまふ
おりろやろ

どんてきぬれの
ぢ大ぢやろうのそ
ろろその日のまやろ
でくいせのぢの
よろひひきむろの
かぶとをきろんそろろる
ぢ力ろるきのぢふよとこえ
時のこのことろちっまとろをえ
ぢろりふあげやっぢーきえしーせとり
ぢっまろかへっそもとともせぢそとっろちろる
よきぢ郎まくゆんぢもたくのふとをひろげ
うーろゆいよとだんのこどそをつき
ろだとそろくてゆりてをろやらぐてろし
んるべさろもきのよせとるてきそをまち
うけそあるひいのとあひさーちろひ
あひろあさてこッのめ一ッとわりをやろの
うろろろひめっぢおさーでどさらろるんぶ
るんたいもくアろりんのてきいいそ
そこ出けひぢやくくんたいっつくてろしを
ろこぶけまろうとっげよろくこでそよろくこそ
てれるまくくのこんでどざーろ出百ぢろ
せんたいまんナちっぢきやろやくそくの
泊のりろ、ぢれ松山ざんぢろとこと
ぢやこせんの林ひかろよそれ山のんい松た
あのーらく天に作をこもとーー松い王い
ふそをふさそろとろい琴ろをひくとろやんの心八回

今そよりめふつろんをしどそ
たぞるぶ油を光こ明が
えんぢふかーろくろっしろの
ろいことどろていこそろ人の
けふきげんよく浦ふを
こまとぢ町まちふきあひて
あげやもさろえからし安らう
ぢ夫のりとさんぢぢろ
るろるりきスもあろろ
えあどをぢーーて
大よせとたんでるこんぢ

名古屋山三妻
梶紡


伴左衛門女房
阿竹

福
折

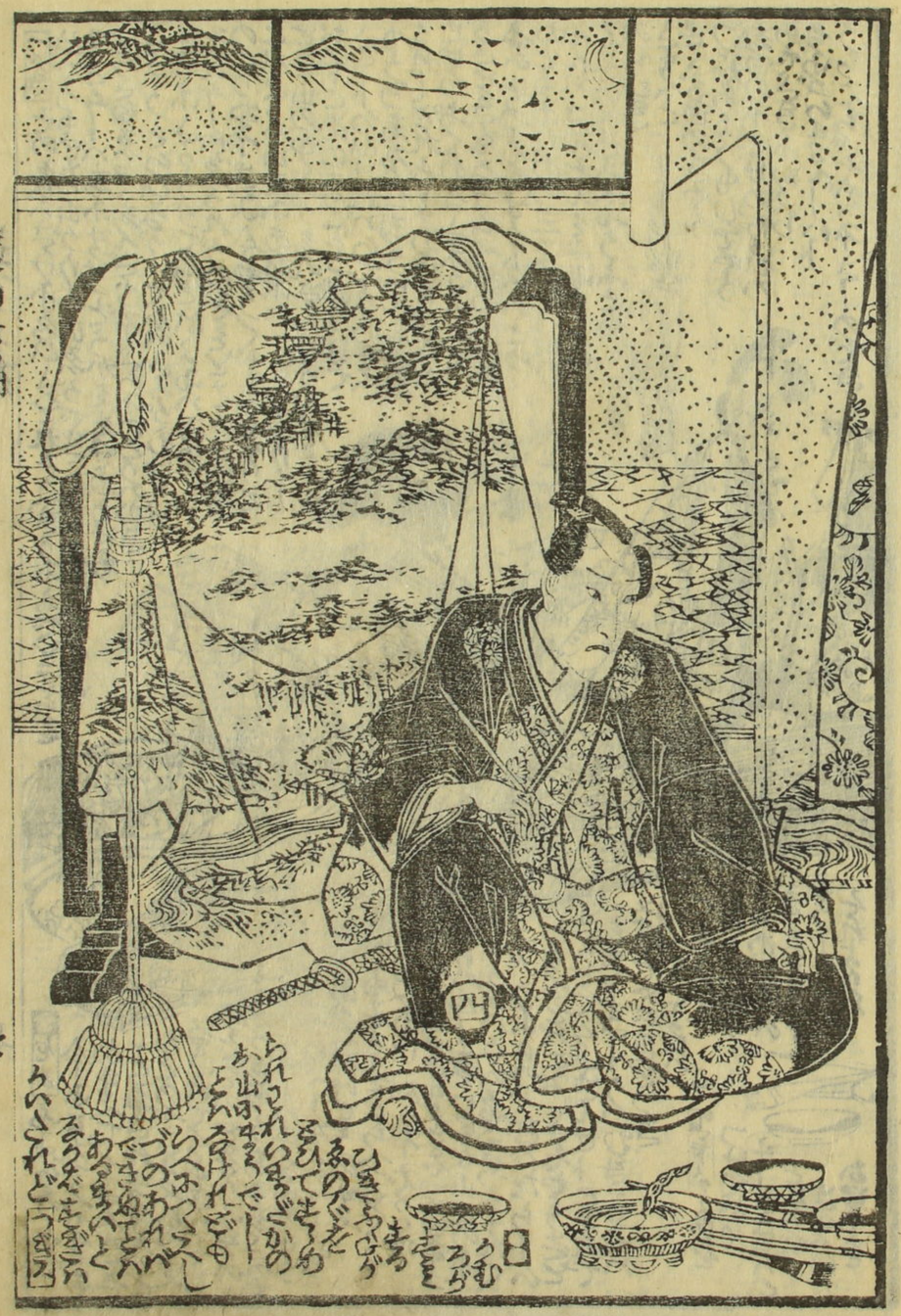
つぎはあうかやこうてちをとこのまず
せのきよかとをとをとりちぎんか
こうてい山三かあをれり
てをとりくかりひ
あきらめあり
りせかりて
ちをめぐら
おせろを
まろがか
んろう
をトく
くれが
ねんと
ぬぎをうち
「ふりいとろ
こころ、ごうとふ
めこれりらつぞや
父のをこうゆそうれ
あくのやをあふぎ
たくりめあてふあろう
ものをぎまぎきえ
やうめえのさろよ
のきさんのをきいろと
ろうこれも日さーをまぐぎ
あてこうはせのきこうとをやまる
てんのあくせとおがえくりあて又
をうりとこんあわせてうれをうつべき◇下へ

◇上の図 てぶそい
トこうれてどを平
をうくとをと
ころのろひこう
いこー「そのそう
けんとひるを
これよりやくくん
のあろうをり平めい
つるぎのこうぞくこの
うくろをのくこへやぎを
ひくやもかをめこり
おがをこころをそうち
こめーと山三ふ
とこーんあとのがの
いくこんうんぎを
をくふこきい
さてこれきやろめい
これをおそきを
あんをきせるが
百日の日ぎり
きれてもうちか
せまーとんのちを
そーむりくびをう
りめさ山三ぶかりひ
あるぎりく心をうむい
ひつぎやうせう
そのうふてのう
しぐんいさまぐ三の巻へ

「この巻より」さいぜんとせてたけ
ぐらいわのひろゆそのこつめの
石のあぐふかけてありそれも
あろうこよりりくーをとと
らーくいれるが山三ま
よりやトのひうけて
たやあをこそる
ぐんまつまおく
きをりこあせ
らぎ心をあつめ
ひいあくとこい
ぬさらぬう
「ふかんで
ふみまんる
ありひあくこちろこもるの
ぐく山三をんりあせ
「きづこひあるる今きてんが
をーへられるけいさてゆそ
それさえきけバトかろと
これていきいこえをてこう
ろ、あくこらこーきころ
ものをトかろとこきーが
ぐんたろきをとりるをして
こづこうひまぐふやうえ
ひろくを
○あくゆそつこひ
こしのとの山ぢか
こけいきらまげの四下へ

◇上の図 かきこりりこせそおうぢいそうく
ざーきのていをうぐひてこれい又ぞうーさ
とおいろるをそーのさのぜんまむ
今ごろのきうをりとげーこをって
とおりひのろ
いぐうさま
あいまいまい
しの
まま
ぐのへ
きをう
のんを
おこりげをされて
おをあいおぎ
おとのぶさまのゆうらやそう
らーいかあをとうて
ぐぢらぎとをそんをとう
あまを
おく
さア
ぎく
ぢやく
あろまトつぎへ

杏
梶


四

四
杏

梶
路

梶
四
杏

水口
四

四

柳亭種彦作　歌川國貞画　合巻摽題

御誂染遠山鹿子　六編四冊

乙月の舘の場より日岡峠の大尾まで年々出板の續狂言

天保丙申春新彫乙未の霜月より五相遠賣出し申し

時代違浄瑠璃内合

風俗江湖傳　八冊

条々助碎て高野山とぐろ鎗の格式教場を不破伴作と武術を爭ふ白井権八相撲入道の女飼の犬をうち殺せの類それぞれ合せて水滸傳のもくげふにする

三扇古渡佐羅紗　全六冊　二編の書切りのさうし

以上三種天保丁酉新彫申冬より發市

芳町川岸ちやぢ橋角　栄久堂　山本屋平吉梓

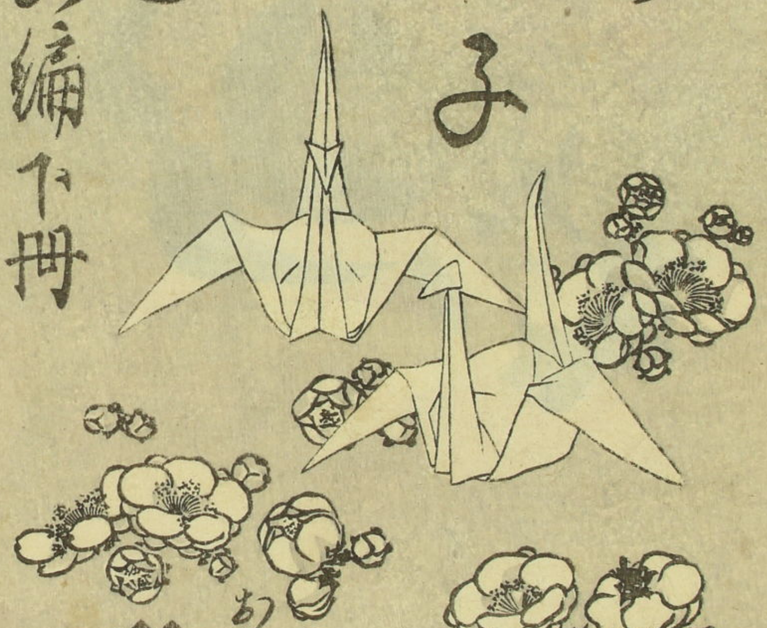
へ13
3810
12

門へ13
3810
12

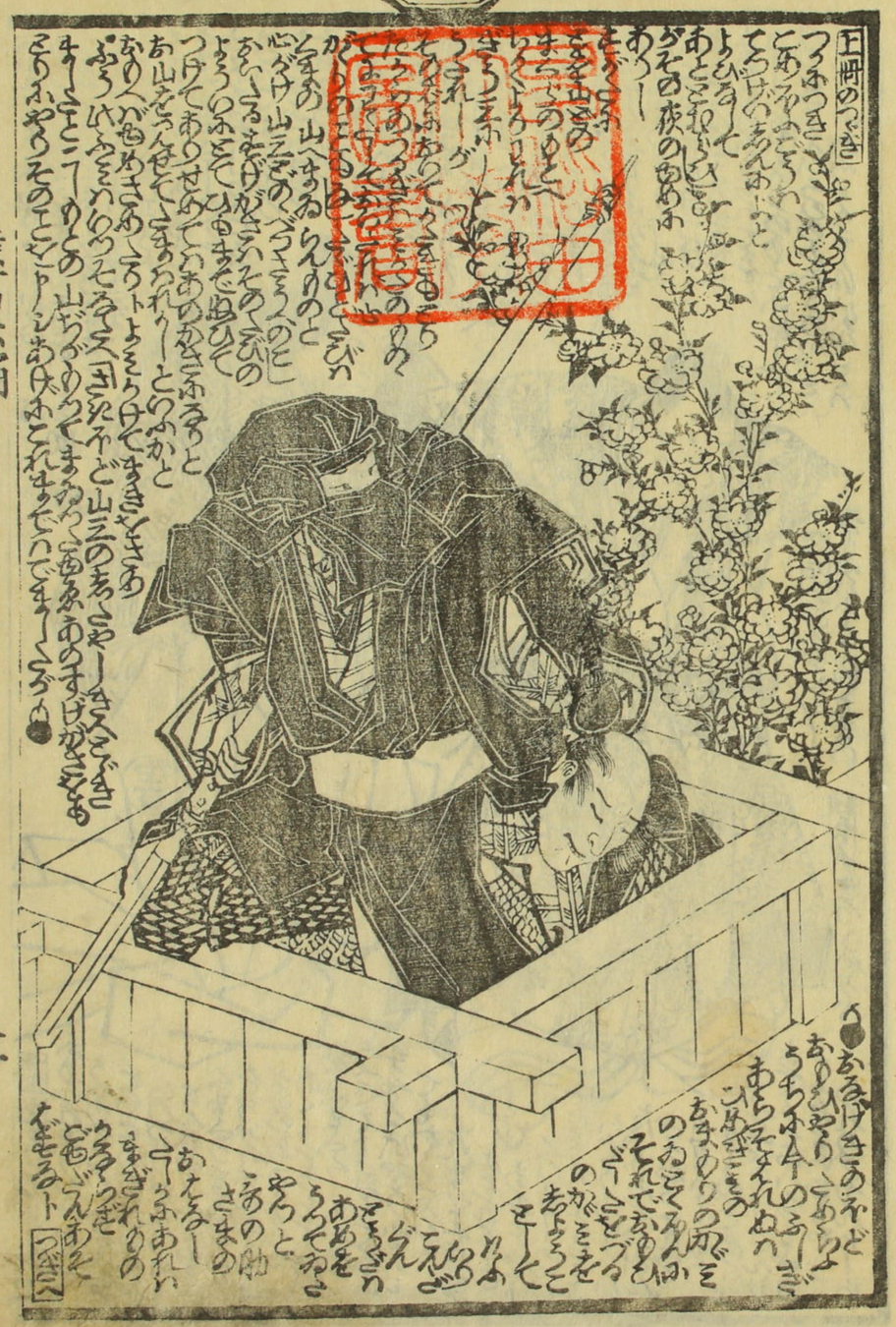
芝山庫子

種彦作
国貞画

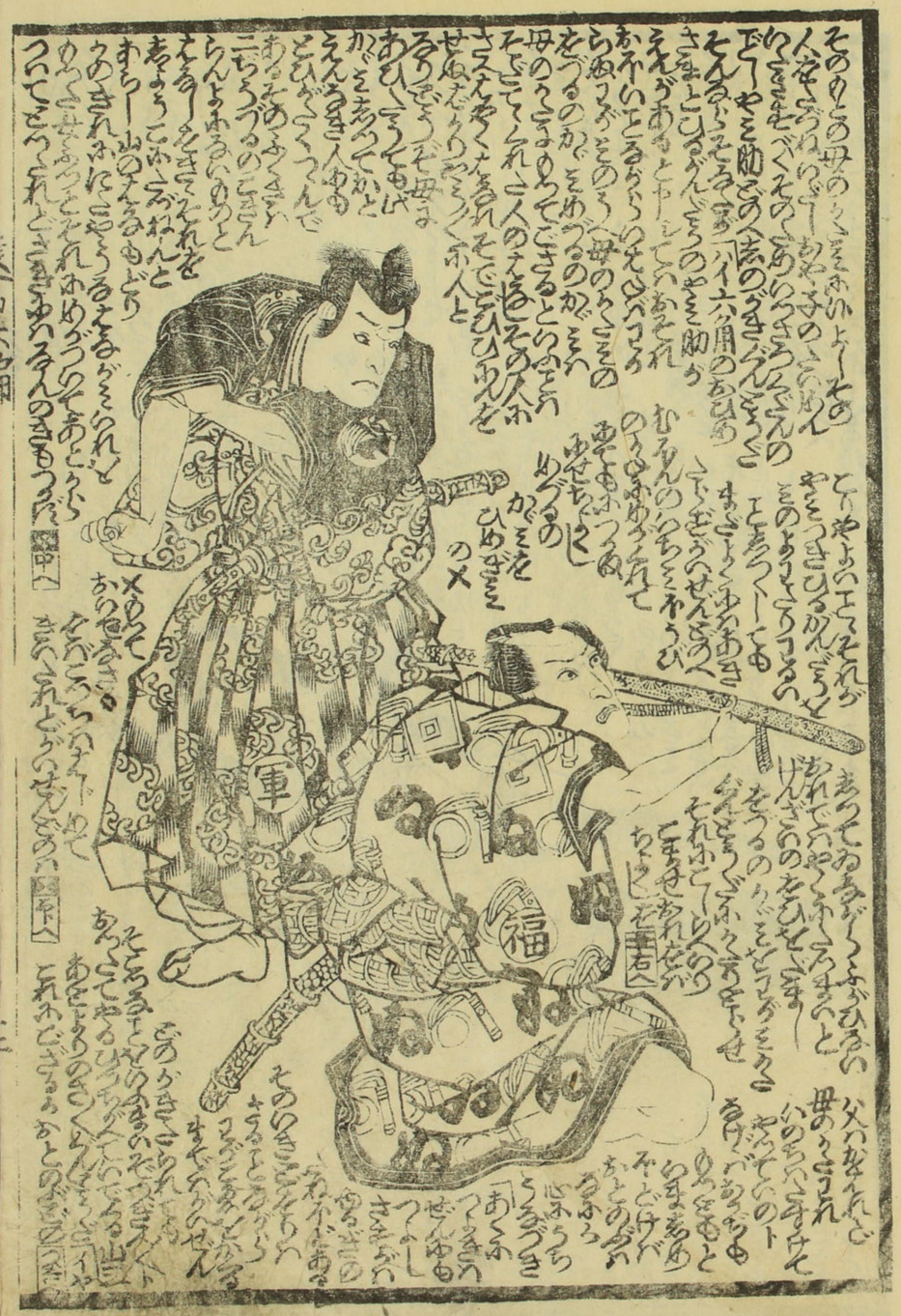
六編下冊

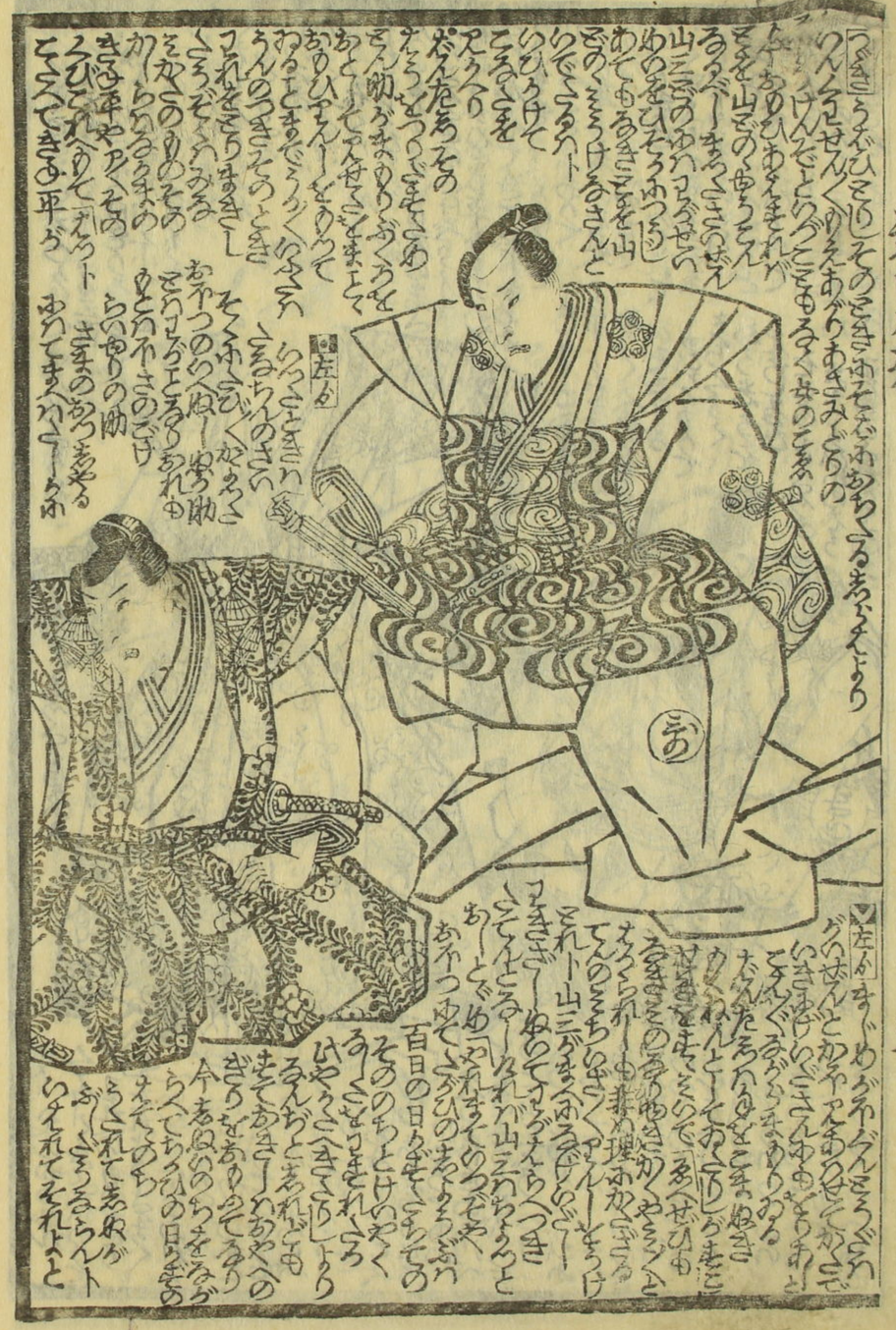


おそぢ
炎
板



害
山


軍
福



つぎ　うぐひすそのときはそぐわあるくるまくそよろ
のんくらせんくのえあぐりあきみどりの
けんぞとらづこともるく女のこえ
あのひわをまれば
そを山ぞのゆうこん
るるぐーきろくさのせん
山三ぞのゆいこるぜの
めのをひそろゆつる
あてもるきこを山
ぞのくころけるさんと
らぞこるハト
いひろけて
こるくこを
ア
だんたろこの
たろうとつぐまこて
さん助がみのりぶくろを
あとしてんせこまとて
あのひやんーをのつて
わるとまるぞうくらふこん
うんのつきこのときこ
これをさりまきし
くろぞこんみる
をかこのめこの
からるるまの
きる平やかくこの
ぐひこれゆりて「ぞハト
ちこてきる平ら

左の　らつこときい
こるちんのさい
そこふこびくかろこ
あやつのゆ一ゆり助
ぞうこるこるあれや
ちこれやこのごけ
らいやりの助
こまのゆつまるる
ゆりてまんらこーるゆ

左の　すーめるやんこうぐい
ぐのはんとかやんあるせてかこぞ
いきまぢいこさんゆめこうあと
こんぐるぐらまりかる
だんたろれるとこまぬき
くれんとーてあ「ぢしがまこ
はきをまこのこ多せひも
こまきこのるりぬきかやこうと
ぞくられーも非か堤ふかこるる
てんのこちらぞくやんーをうけ
これト山三ぐまくふるぐひのこー
つきぞーぬのてうるたらくつき
こてんとるーこれが山三ぐちろこと
あーとぐめこれまてめつこやや
あやつゆてこぐひのまころこぶい
百日の日らぞこうこのこ
そのこのちとけいやく
るくこをちまれころ
けやここきこ「しこう
るんぢとまれこも
まてあきーわあやへの
ぎりをありのこるり
今あぬのこちをなが
らてちこれの日らぞあ
えこてのち
こうこれてまあぬが
ぶーこうまらんト
らこれてこれとこ

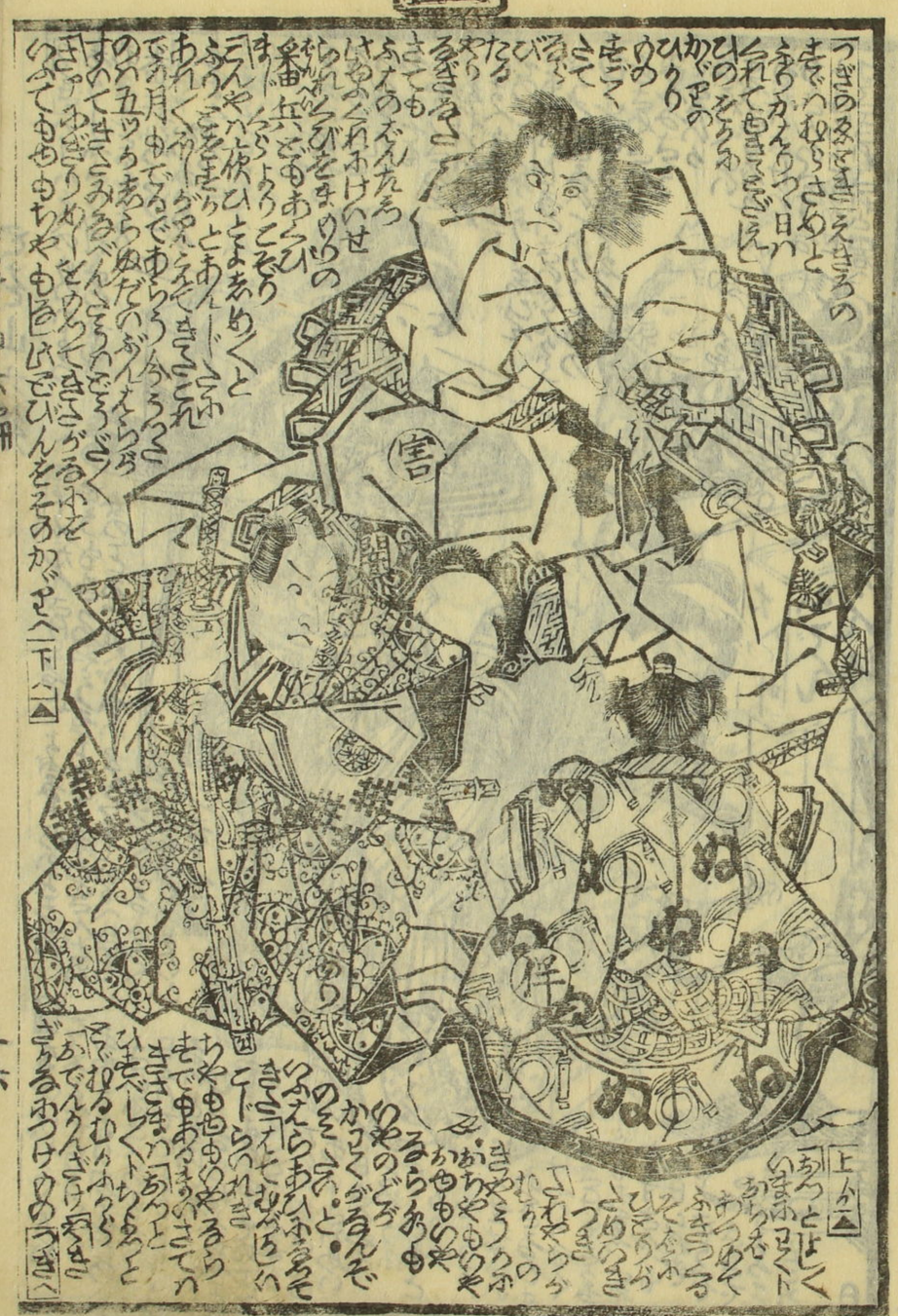
きーぐまこうびの
もこぐりつこそ
「まるまちこれ」
のこうぐくこれ
けんびのぬまぶち
ぐのべんまこうここん
ころまこのこぐこ三の
ころまよかこうぬこより
ぬけみちのまこる
ん人きる平を
まこまおいん
こうこまこ
そのこちまこを
かこぐ人ぬこうんぢを
こうりわを
てあひ
やこまこ
くぐトの
あ
かこ
んん
たこん
このこん
つまこまこと
こんぢここ平の助の
こかこーこトこそれて
きる平こうこひこー「おまくい
おぢこんのこちの人ちぐこ六と」「右へ

たんたこのめこと
こをあつこあこうこれわこく
おぢこんぬこうこ
これとまこのこ
こうこまこ
こうこ三の
ここ
こ
こ
こ

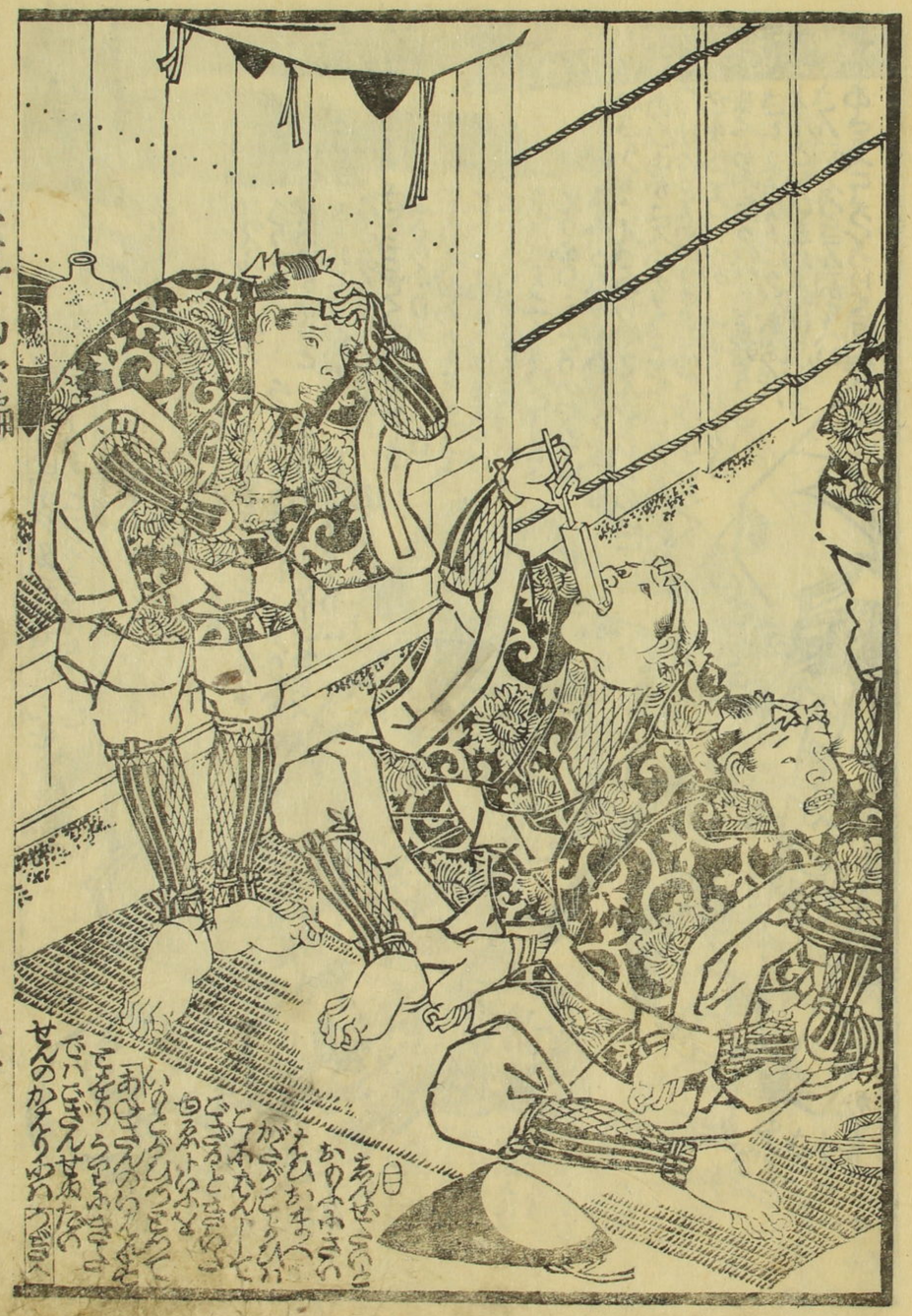
梶
三の
上
美艶仙女香
黒油美髪香
坂本氏
精製

軍

山
根
古


宮
伊

春
竹
ちでん酒



春
竹

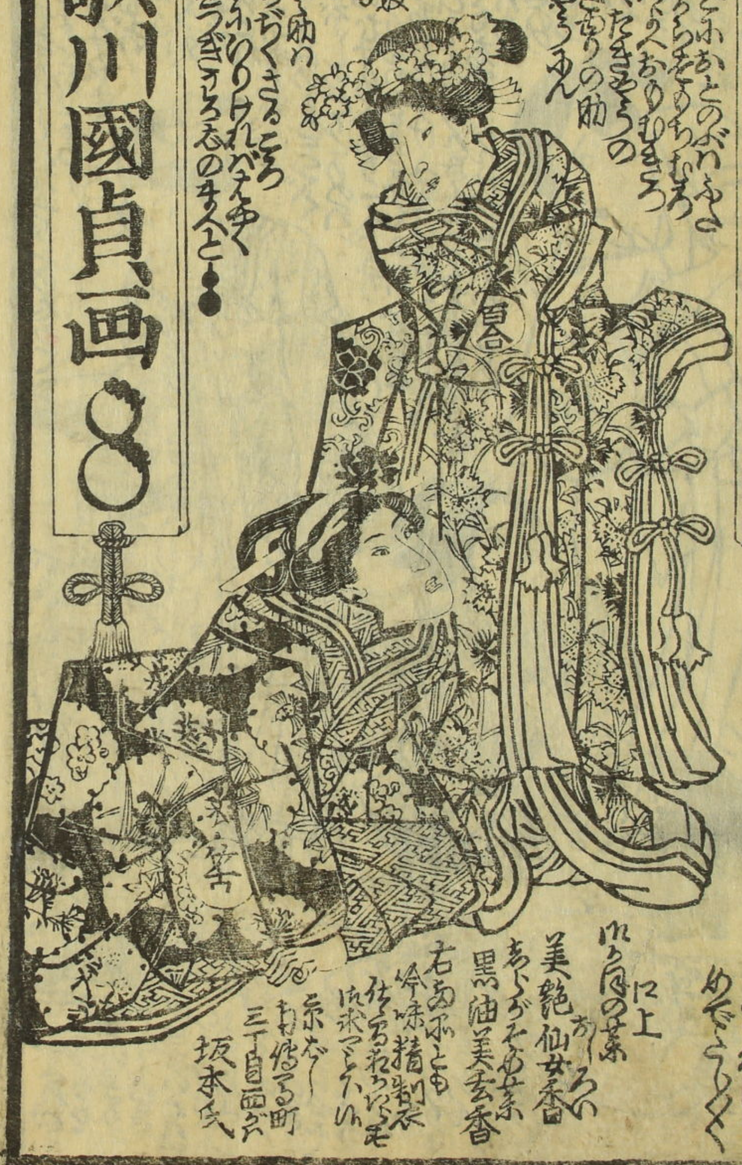
春
伴
竹舌

三の

春

山
伴

柳亭種彦作



歌川國貞画 8

天保七申春新刻目録

東海道五拾三驛 前編 鶴屋南北作 後編 歌川國芳画 毎編四冊

千本櫻後日仇討 墨川亭雪麿作 全四冊 五風亭貞虎画

四屋敷筆操 式亭小三馬作 全四冊 香蝶楼國貞画

菊壽童三編盃 山東菴京山作 全六冊 香蝶楼國貞画

操競優軍配 浦里姫 式亭小三馬作 白妙姫 五雲亭貞秀画

夜討曽我人形製 三亭夫日馬作 後編六冊 香蝶楼國貞画

土筆長日樂書 墨川亭雪麿作 全六冊 香蝶楼國貞画

美艶仙女香 京ぢ 坂本氏
黒油美玄香 芳町 親仁橋角

炎 地本錦繪問屋 芳町親仁橋角 山本平吉板